よねさと 人推協だより

第75号
2023.10.1
発行
米里地区
人権啓発
推進協議会

2023年度 半年を振り返って

米里地区人権啓発推進協議会
会長　石谷 幸四郎

2023年も新型コロナウイルス感染症でスタートしました。役員総会は、本年もやむなく書面議決で実施いたしました。

5月8日ゴールデンウィーク明けに、新型コロナウイルス感染症が5類に移行され、自己判断でマスク着用となりました。これまで出来なかった人権啓発活動を実施すべく頑張っていきます。ご協力をいただきますよう、お願い申し上げます。

役員研修会

7月2日(日)米里地区体育館にて講演会を実施しました。テーマは、日本認知症本人ワーキンググループ代表理事　藤田和子様、鳥取市中央包括支援センター認知症地域支援推進員　金谷佳寿子様により「認知症になっても大丈夫!そんな社会を創っていこうよ」でした。※詳細は後述

小地域懇談会

本年度は再開することができ、認知症や周りから見えにくい障害等のDVDを、各地域に選んで頂き、視聴し、感想を書いていただく方法で実施します。10月1日現在、長砂、西大路、雲山中央、古郡家で実施され、今後、雲山南と東大路で実施予定となっています。まだ日程が決まっていない地区は至急に日程を調整して連絡をお願いします。

現地視察研修

8月25日(金)実施いたしました。京都人権ゆかりの地を訪ねて(水平社創立の地・清水寺・東寺)巡り、世界人権問題研究センターのボランティアガイドの案内で、28名の方に参加いただきました。ありがとうございました。※詳細は次ページに

その他行事予定

・米里まつり
10月28日・29日
・鳥取県の拉致被害者パネル展示予定
・桜ヶ丘ブロック同和教育研究集会（11月19日）
・桜ヶ丘ブロック人権啓発推進員研修（2月頃）
・推進員研修各種実施中

役員研修会

推進員　福田　千鶴子

講演会は、鳥取市認知症本人大使の藤田和子さんを講師にお迎えし、『認知症になっても大丈夫!そんな社会を創っていこうよ』という演題でした。なるべく多くの方に参加していただこうと、公民館と共催で地区の皆さんに広報したところ、43名の参加がありました。

藤田さんは、45歳の時にアルツハイマー病と診断された後、地元の鳥取市で認知症の本人としての発信を始められ、一般社団法人　日本認知症ワーキンググループの代表理事をされています。講演は、とてもおだやかな口調で、時々パートナーの中央包括支援センターの金谷佳寿子さんのお話を交えながら進められました。

人前で話すのが大嫌いで、後ろの方で聞いている方が好きだったという藤田さんは、小学校PTAの人権推進部の活動で、世の中には様々な差別が存在していることを知り、さらに学習を深めて、自分は差別をする側になるのか、差別をなくす側になるのか、という問いに出合われます。そして、なくす側の立場として何をすべきかを考え、声を発信することにしたそうです。

金谷さんによると、認知症と診断されたら、初期でも包括支援センターに相談すると、良い情報や語り合える場が見つかるので、早めに本人が声を上げて発信してほしいとのことです。

全ての人が年とともに機能が下がっていきます。認知症は早期発見により薬の投与を早めることができるので、不安に思っている人はかかりつけ医に相談した方がいいとのこと。

最後に、藤田さんは認知症という病気に対する理解よりも、その人たちとの暮らしを自分のこととして考えてみてほしいと言われました。「**認知症とともに生きる希望宣言**」は、一足先に認知症になった方々の体験や意志をもとに、よりよい社会を一緒につくっていこうという輪が広がることを願って発信されています。

《認知症とともに生きる希望宣言》

1 自分自身がとらわれている常識の殻を破り、前を向いて生きていきます。
2 自分の力を生かして、大切にしたい暮らしを続け、社会の一員として、楽しみながらチャレンジしていきます。
3 私たち本人同士が、出会い、つながり、生きる力をわき立たせ、元気に暮らしていきます。
4 自分の思いや希望を伝えながら、味方になってくれる人たちを、身近なまちで見つけ、一緒に歩んでいきます。
5 認知症とともに生きている体験や工夫を活かし、暮らしやすいわがまちを一緒につくっていきます。

第49回 人権尊重社会を実現する鳥取市民集会

推進員　大坪順子

この集会は、同和問題（部落差別）をはじめとするあらゆる人権課題の解決をめざして研修を深め、実践と交流の輪を広げることを目的に開催されるものです。本年度は「すべての市民の人権が尊重される鳥取市を創造しよう」～互いに気付き、支え合える地域づくりを～を主題に8月22日にとりぎん文化会館をメイン会場に行われました。全体会では、島崎藤村原作の「破戒」が上映されました。本作の舞台は、日清・日露戦争で社会が大きく揺れ動いた明治後期。江戸時代の身分制度は廃止されていましたが、当時の人々の心の中に根付いた差別意識が、そう簡単になくなるものではありませんでした。部落差別が「日常」であった時代です。丑松は、故郷を遠く離れ、教職についていました。差別が公然となされ、人々がそれを疑問にも思わない時代でした。被差別部落出身という出自を隠して過ごしていた丑松の生活に、不穏な影がさします。丑松の出自を疑う同僚の出現。その人による職場の中で繰り返される挑発的ないやがらせ。ささやかれるうわさ。子ども達が戦場に喜んでいくように教育することを、国家の大事と考える教師の存在。差別と闘う、心の支えとしてきた人の非業の死。出自ゆえに諦めようとした恋。いろいろな事柄が絡み合い、しだいに追い詰められ、夜も眠れない烈しい苦悩の日々が続きます。ついに、丑松は、父の戒めを破り、子ども達にすべてを話し、去っていきます。その中でのわずかなすくいは、ただ一人理解をしてくれた同僚の存在と実った恋。そして彼を慕ってくれる教え子たちの存在でした。新しい土地へと旅立つ姿に幸あれと祈るような気持ちで鑑賞を終えました。1世紀前の時代を生きた丑松の経験は過去のものでしょうか。上映前に古田会長が挨拶の中で言われた「丑松が最後に抱いた希望は、本当にかなえられたのだろうか。人権問題と自分との関わりについて認識が深まることを期待しています。」という言葉に今回の上映の意図を感じました。

部落差別の問題は姿を変え依然として存在しているのです。粘り強く取り組んでいかなければいけない問題だと感じました。

全体会の後、会場を変え、人権課題別の7つの分科会

1 子どもの人権
2 男女共同参画
3 同和問題（部落差別）
4 障がいのある人の人権
5 地域における人権の取組
6 企業における人権
7 特別分科会（社会的孤独・孤立）

に分かれました。

参加した7分科会は、「ひとりぼっちをつくらない!つながる地域社会の創造のために」をサブタイトルに、NPO法人抱樸（ほうぼく）の奥田知志さんの講演「助けてと言えるまち―ひとりにしないという支援―」を聞きました。抱樸には、「誰か」と出会い、ありのままに「受けとめ、受けとめられる」関係を築きたい、という願いが込められています。困窮と孤立が深刻化していく日本社会において、「家族機能の社会化」を担い、出会った方々の「出会いから看取りまで」という「人生支援」の活動をしておられます。「赤の他人であってもできることがある」ことを証明するための実践を行ってこられ、この活動の中で関わった睡眠薬依存のA子さんの事例を中心に話されました。A子さんの事例について、現実は、ドラマのようには、うまくいかないものだとつくづく感じました。そして抱樸の「わたしがいる。あなたがいる。なんとかなる。」という言葉に勇気づけられる思いがしました。